

三門

三門は、建長寺で最重要の建造物の 1 つであり、境内に入って最初に目に入るものです。禅宗の寺では伝統的にこうした門が配置されており、寺の神聖な領域と日常の世界の境界の目印となっています。

三門には扉がありません。これは、建長寺がいつでも禅を学びたいあらゆる人に開かれているということを示すもので、この考え方は建長寺の初代住職である蘭溪道隆（1213-1278）の主要な信念の 1 つでした。木造のこの門は約 20 メートルの高さがあります。2 階部分は楼上と呼ばれ、500 体の阿羅漢像が安置されています。門をくぐってこれらの像の下を通ることで、心を清めて寺の教えを吸収できるようになると言われています。

現在の三門は 1775 年に建てられたもので、重要文化財に指定されています。それまであった門が火事で焼失した後、日本中から寄付が集められ、再建されました。伝説によると、建長寺の僧たちから餌をもらっていたタヌキが、その親切のお礼として、僧に変身して寄付金集めに参加したとのこと。今日でも、三門はタヌキの三門としても知られています。